

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 11
- 04 特集 **NGO**
世界をつなげる
市民のちから
 - 鼎談 ACE×シャンティ国際ボランティア会
×JICA国内事業部
 - 08 NGO×JICA 連携の歩み
 - 10 一からつくる未来の農村 南アフリカ共和国
 - 14 孤立した元難民を“水”でつなぐ ザンビア
 - 16 家庭菜園で食生活を改善 ホンジュラス
 - 18 初等教育に芸術教科を カンボジア
 - 20 出会いが芽をはぐむ 愛媛県
 - 22 楽しく学び、楽しく備える防災教育 ネパール
 - 23 応援をカタチにする ネパール、インドネシア
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 10
サモア
- 26 ザ・研修⑥
“日本式”学校体育のよさを途上国へ
- 28 地球ギャラリー Vol. 132 インド
写真・文●松尾 純 フォトグラファー
辺境に生きる
- 34 教えて！外務省
知っておきたい国際協力②
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 広報室から、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol. 12



南アフリカ共和国で活動するTAAの平林薫さんと現地の有機農業塾メンバー(10ページ参照)。写真：吉田亮人



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

青春の1ページにある 理想のNGO

文●高野秀行



イラスト●中村知史

今から20年ほど前、「四万十・ナイルの会」という環境保全NGOに関わってアフリカ・ルワンダに通っていたことがある。このNGOの代表は探検家・冒険家の山田高司さん。彼は南米とアフリカのおもな川を舟で旅してきたが、各地で進行する環境破壊に胸を痛め、旅を中断して環境NGO「緑のサヘル」の立ち上げに参加し、およそ5年間、アフリカのチャドで活動していた。そして、さらに次の段階として、自分の理想とするNGOを立ち上げたのだ。スタッフは山田さんのほかは私一人だった。

それは一言でいえば、「全ての人が身の丈に合った、持続可能な生活」をするNGOだった。具体的にはナイル川源流域に位置するルワンダで環境保全活動をするローカルなNGOを見つけ、私たちはそのNGOを技術的・経済的に少しばかりサポートする。私たちの側も一方的にルワンダの人たちを支援するのではなく、同じように四万十川で環境保全活動を行う。誰も専従スタッフにならず、みんなが普通に生活しながらできる範囲で活動をしようということなのである。

私たちはルワンダのほぼ全地域を回り、地元環境NGOを訪ねた。その中からENERWA(エネルギー)というNGOを選んだ。当時ルワンダは、1994年に起きた大虐殺からまだ3年しか経っていない。国の雰囲気は暗かったが国民は意外なほど勤勉だった。とりわけ、そのエネルギーの中軸を担っていたカレラという人物は、機械やコンピュータに強く、細かいところまで気がつき、びっくりするほど働き者だった。私たちはよくカレラに「早くしろ」とか「急ごう」とせかされたものだ。アフリカ経験の長い山田さんも「現地の人にせかされたのは初めてだ」と驚いていた。理想のNGOは最初の3〜4年はけっこううまくいっていた。カレラの八面六臂の活躍もあって、薪を得るための植林、燃焼効率のいいかまどの普及、それに小規模な育苗所作りなどを実現できた。山田さんは四万十川流域の森林組合

に入り、森の手入れをしたり、炭焼きを習ったりしていた。私は連絡係とか書類作成などの雑用をしていた。年に1度、山田さんと二人でルワンダを訪れ、カレラたちの活動を見学し、アドバイスをしたり一緒にビールを飲んだりした。そして毎回「時間がないから急げ」とか、「君たちはもつとパソコンを使いこなす必要がある」などとカレラに叱られていた。そこでは国や人の間に上下関係がなく、すべてがささやかに、でも気持ちよく回っている気がした。

しかし、この状態は長く続かなかった。現地の総責任者であるカレラが突然、フランスへ亡命してしまったのだ。根っこは94年の大虐殺にある。彼は大虐殺であやうく殺されかけたいわば被害者なのに、内戦後に新政権ができてからはなぜか加害者側だと思われ、復讐のターゲットになってしまったのだという。

カレラあつてのエネルギーであり、エネルギーあつての私たちがだったから、ナイルの会の命運はここに窮まってしまった。カレラの後を追って、奥さんと娘さんもフランスへ亡命した。その旅費は私が出した。私はナイルの会からは一銭ももらっていない代わりに一銭も出していなかった。初めての経済的貢献が、ナイルの会が事実上終了した後だったとは皮肉な話だ。今、写真や映像で見るルワンダは驚異的な近代化を遂げている。私たちの素朴な試みが夢のようだった。理想のNGOは今や青春の1ページとなってしまったが、カレラとのつきあいはまだ続いている。来年はフランスのパスポートがとれるので、日本に来るといふ。きつとまた「時間がないから急ごう」とせかされるにちがいない。

高野秀行(たかの・ひでゆき)

ノンフィクション作家。1966年、東京都生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒。同大探検部の活動を記した『幻獣ムベンベを追え』(集英社文庫)でデビュー。2013年に『謎の独立国家 ソマリランドそして海賊国家 プントランドと戦国南部ソマリア』(本の雑誌社)で第35回講談社ノンフィクション賞、第3回梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞。近著には『謎のアジア納豆』そして帰ってきた『日本納豆』(新潮社)など。1992〜93年にタイ国立チェンマイ大学日本語科で、2008〜09年に上智大学外国語学部で講師を務める。